

勝俣友子の場合

息子の雄大がうつだと診断されて私はどこかほっとしていた。原因のわからない頭痛や腹痛を繰り返して昼も夜もソファに顔を埋めるように横になっている中学生の息子を見るのはつらかった。いつ抜けるのかわからない暗闇のトンネルのなかをずっと歩きつづけるのはきつかった。父親のいない家にした自分を悔やんだ。でもこれで少し前を向ける。戦う相手がわかれば戦い方も考えられる。悩むことと考えることは大きく違うはずだ。薬を飲んで、日々の生活のリズムを整えて、心の折れた部分が修復されていくのをゆっくり待つ。根気がいるけれど前を向こう。私はそう覚悟を決めた。医者も薬は必ず効果がある、と言っていた。薬剤師が雄大に体重を訪ねた。雄大は答えようと口をあけた。けれど言葉はでてこなかった。

「だいたい60くらいです」

私が笑いながらかわりに答えた。薬剤師は頷いて薬を小分けの袋に入れはじめた。私は雄大を後ろの長椅子に座らせた。バックからハンカチを出して額の汗を吹いた。秋なのに今日は少し暑い。

家に帰ると玄関に数人の主婦がいた。私を見つけるといっせいに近づいてきた。見慣れた顔もある。近所のひとたちだ。みな眉間にしわを寄せている。ヒステリッ

クな顔だ。私は背中を緊張させて彼女たちをかきわけて玄関を強引にあけた。そして雄大をなかに入れてドアを閉めた。

「どうかしました？」

主婦の代表らしき 50 すぎの女が紙を渡しながら言ってきた。予感があった。

「雄大君のことなんですけど」

「雄大がどうかしましたか？」

「施設に入れてください」

「は？」

「この施設はあの青柳さんが提唱して企業の賛同を得て作られた由緒正しいものです」

私が答えずにいると、横の太った眼鏡が口をはさんできた。

「署名を 700 人集めたんです。おたくの息子さんを施設に送る要望書です。これを保健所に届けようかと思ったんですが、財前さんが直接説明したっていうから」

財前さんは雄大と同じ年の女の子のいるお母さんだ。雄大と同じクラスのときはよくお茶をした。優しいひとだ。財前さんを見ると、申し訳なさそうな顔で下唇を小さく噛んだ。

「施設に入れてください」

代表の女がもう一度言った。容赦しませんよ。そんな言い方だった。

「これはもう制度なんです。心の弱さを認めざるを得ない人間は一度施設に入ってその弱さを取り除く治療を受けるんです」

聞いたことがある。その施設は心をゆっくりと麻痺させる。そういう薬物治療をするところだ。酷いところは、一切の感情の起伏を起させないようにしてしまうらしい。

「施設は、大丈夫です」

「何が大丈夫なの？これはあなたたちの問題じゃないのよ。近所から悪魔がでたら困るのは私たちなのよ」

「雄大は、大丈夫です」

「うつだったんでしょ」

「どうしてそれを？」

あの薬剤師の顔が浮かんだ。あいつ。

「悪魔になって殺されたら困るのはあなたよ。そうならないように予防するだけよ。もし悪魔になったらチームにすぐ殺されるわ。勝俣さん、息子さんを殺すの？」

「雄大は、大丈夫です」

「大丈夫じゃないから、こうして来たの！」

眼鏡がヒステリックに叫んで私の肩をつかんだ。振り払おうとして私はその場に尻餅をついた。カチャッとドアがあいた。その瞬間、誰かが飛び出して眼鏡を突き飛ばした。全員が悲鳴をあげた。

「帰れ！帰れ！帰れ！母さん、入ろう」

久しぶりに聞いた雄大の声だった。雄大は私の腕をもって家のなかに入ってドアに鍵をかけた。雄大はそのまま何度も息を大きくしてそのままそこにうずくまった。ドアからのぞくと主婦たちは何かをしばらく話していたが玄関に赤い紙を貼って立ち去っていった。それが何かわからなかったけれどもうドアをあける気力はなかった。雄大はそのままそこにじっとしていた。そして小さな声で言った。

「悪いけどこのままにしておいてくれる？」

私は頷いて台所に行った。

夜。私は火の匂いで目が覚めた。二階の寝室から窓を見ると空がオレンジに染まっていた。窓から下を見ると下にたいまつを持った人たちがたくさんいた。真ん中にあの主婦たちがいた。その中心にテレビで見た事のあるあの青柳がいた。たいまつに見えていたのは火炎瓶だった。ゆれる炎の向こうに見えるたくさん顔が悪魔に見えた。正義ってなんだろう。何が正しいんだろう。自分と違うものをどうしてひとはこんなにも簡単に憎むんだろう。私は世界の矛盾を情けなく思った。みんな普通に生きていただけなのに、どうして他人の幸せは自分の不幸のように感じるんだろう。どうして他人の不幸は自分の幸福のように感じるんだろう。青柳が手をあげるのが見えた。すべての火炎瓶が一斉にうちに投げ込まれた。雄大！私はそう叫んで雄大の部屋に行った。ドアに鍵がかかっていた。雄大！雄大！雄大！返事はなかった。誰かが背中を叩いた。雄大が立っていた。泣いていた。私は息子を力一杯抱きしめた。煙でもう何も見えなくなりそうだった。